石手川ダム建設

日照りの年には水不足となる松山市では、昭和三五(一九六〇)年、市民の飲料水を確保するために、湯山の内地区柳に石手川ダムの建設計画がたてられたが、県が工費の一部負担に難色を示し、昭和三九年八月の渇水まで宙に浮いたままであった。このときの渇水で再びこの計画が注目されたのは、中央都市圏構想を実現するためには、重信川の伏流水や地下水を取水している市内四カ所の取水源の給水能力では、数年後には需要をまかない切れなくなるため、上水道問題の解決が急務となったからである。このため、建設省とダム建設計画を再検討した結果、当初計画した同ダムの利用計画から工業用水を除き、上水道確保と治水を兼ねたものとし、工業用水には、同ダム完成後に、重信川の伏流水を当てることとし、一一万トンの供給能力を計画した。昭和四一年七月、河川審議会は工事実施計画を決め、建設大臣に答申、昭和四二年三月、現地調査を実施のうえ湯山の内地区柳橋下流五〇〇メートルを建設地点とし、水没面積〇・四平方キロ、ダムサイトから上流の集水

面積七二平方キロ、一日最高九万九、〇〇〇トン、平均七万一、〇〇〇トンの給水能力（貯水量九三〇万トン）とすることが決まった。ミカン農家からの強い要望で農業用水を取り込むことになり、ダムの規模を大きくする設計変更（貯水量一、〇五〇万トン）がなされたが、総工費七〇億円で昭和四三年に着工、溝辺の市之井手浄水場とともに、昭和四八年三月に完成した。総工費七八億円、堰堤の高さ八七メートル、長さ二七七メートル、総貯水量一、二八〇万トンの上水道と農業用水の供給とともに洪水調整の役割を担う多目的ダムとなった。